

汚染水の海洋放出阻止しよう

全漁連と県漁連が首相に あらためて「放出反対」明言

東京電力福島第一原発事故でたまり続けるトリチウムなど放射性物質を含む汚染水の処分方法について、政府は13日にも関係閣僚会議を開き、海への放出を決定する方針を固めたと報じられています（右側写真、4月8日福島民報1面）。4月7日、全漁連と県漁連の代表は、菅首相に対して「反対の考えはいささかも変わるものではない」と述べ、海洋放出断固反対の姿勢はまったく変えていません。

2015年8月、福島第一原発の原子炉建屋周辺のサブドレン（井戸）から地下水をくみ上げ、浄化して海洋放出する計画を実施する際、県漁連が「漁業者、国民の理解を得られない海洋放出は絶対に行わないこと」と求めたのに対し、政府は「関係者の理解なしには（処理水に関する）いかなる処分も行いません」と県漁連と約束を交わしています。今回の決定は、この約束を一方的に破るものです。

「風評」ではなく実害 「トリチウムは安全」のウソ

福島県内では、全59自治体の7割を超す46市町村議会で、処分方法についての決議や意見書が採択されており（昨年12月末現在）、その大半が海洋放出反対や慎重な対応を求める内容となっています。福島県内の



団体が呼びかけて経産省に提出された海洋放出反対署名は42万筆を超えています。「関係者の理解」が得られているとは到底言えない状況です。

●トリチウムによる内部被曝の危険性

報道でも明らかのように、政府は「風評対策」だけが問題であるとして、最後は「賠償」で解決しようとしています。しかし、大事なことは、風評ではなく、実害だということです。トリチウムは水素の同位体です。生物内で有機結合型トリチウム（OBT）に変化することがあり、その場合、細胞の構成成分として取り込まれタンパク質やDNAの中の水素に取って代わります。長期間体内にとどまり、内部被曝をひき起こすだけでなく、染色体を破壊することもあります。

玄海原発はじめ国内でも海外でもトリチウム由来とみられる白血病などの被害が、原発

周辺では他の地域よりも多いことは知られてきました（※下記『吉崎新報』記事参照）。

「因果関係はわからない」として、原発を推進する国と電力会社によって闇に葬られてきただけです。「原発の通常運転でトリチウムは放出されているから安全」などというのは本末転倒なへ理屈です。この汚染水問題が起こるまでは、ほとんどの人がそんなことは知らされてきませんでした。原発推進にとって都合が悪いからです。「IAEAの査察を入れれば問題ない」などという原子カムラが都合よく描いたシナリオに乗ってはいけません。

福島の子どもや若年者の甲状腺がんの多発は、県の公式発表だけでも250人を超え、全国がん登録によると、福島県は震災後、他の

都道府県に比べて胃がんなどが多発していることも明らかになっています。放射能の被害は実害であり、ごまかしは許されません。

核のゴミの最終処分場候補地に20億円のカネにつられて手をあげる自治体が出るなど、原子カムラにがんじがらめにされている現実には、今も変わっていません。悔しい限りです。

●住民の分断は原子カムラの思うつぼ 原発も再稼働も絶対反対！

福島県民はみな原発事故の被害者です。これ以上分断させられては原子力推進勢力の思うつぼです。3・11の原点に立ち返り、汚染水放出に絶対反対し、「原発も再稼働も絶対反対」の声を、福島からあげ続けていきましょう！

身体への影響は皆無なのか

『吉崎新報』2019. 2. 20社説より

玄海原発と白血病に関する研究を進めている、元純真短期大学講師で医学博士の森永徹氏の研究資料とシンポジウムでの発表は興味深い。内容には、玄海原発30㎞圏内を有する本市にとって、聞き流すことができない重要な情報が含まれている。

これまで唐津市などの原発周辺では、玄海原発の稼働差し止めを求める訴訟が起き、原告側は差し止めを求める理由の一つとして玄海町とその周辺での白血病による死亡の増加を挙げている。対して九電側は白血病の増加は高齢化によるものであると反論し、他にもその地域で昔から風土病といわれる成人T細胞白血病を原因とする意見をあげている。またこの風土病は西日本に多いことも理由にする。一方で森永氏は、成人T細胞白血病、すなわち風土病について、科学的に検討したものは一つも見当たらないとして独自に検討を進めてきた。

玄海原発からの距離と白血病死亡率の変化で、佐賀県内20自治体ごとの原発稼働前（昭和44年～昭和51年）と稼働後（平成13年～平成24年）の年平均白血病死亡率（人口10万対）と、玄海原発から各自治体までの距離の関連を調べた結果、玄海原発に4・1㎞近づく毎に10万人当たり1人、白血病死亡率が増加するというものとなった。また、昭和50年の稼働前と後との比較で

は、4倍以上の増加率になっている。

また放射性物質の放出になるトリチウム（放射性水素）は、体内に入ると白血病を誘発するとされる。玄海原発は全原発の中で最もトリチウムの放出量が多く、全国1位だ。

トリチウムは自然界にも存在し、新陳代謝で体外排出されるといわれている。しかしタンパク質や脂肪に取り込まれた有機物結合型トリチウムは排出までに長い年月がかかる。さらに海に放出された水から、魚介類などを介して生物濃縮され、食物連鎖で私たちの体内に入るようになる。いわば内部被曝のようになる。この流れから白血病を誘発している可能性は否定できない。

森永氏は、「玄海原発が全国一トリチウムの放出量が多いこと、トリチウムは原発周辺の海水、大気、水産物を汚染すること、動物実験ではトリチウムは白血病を誘発する傾向があること、同じ原発立地自治体でもトリチウム高放出と低放出原発立地自治体の住民の間には、白血病死亡率に統計学的有意差がある」ことから、玄海原発周辺の白血病の多発の要因は、玄海原発から放出されるトリチウム以外には考えられないと示唆している。本市は身体への影響の調査を、早急に要求せねばならない立地にあることを忘れてはならない。